

科目連携、分野横断型 チームティーチングの提案

名取良太(関西大学)

アクティブラーニング実践の議論

- アクティブラーニング
 - 主体性を引き出す能動的・自発的学習
 - 双方向型／参加型学習
 - 課題解決型学習
 - 政治学分科会における議論
 - 多人数科目におけるアクティブラーニングの目的と効果
 - アクティブラーニングの具体的取組(方法)の紹介と検討
 - ファシリテーター(TA等)の必要性検討
- ・・・実践した方が望ましいことは共有できたが...

先行する(?)取組と経験

- 初年次教育(導入教育)の実践
 - 少人数教育(30名の専任者がクラスを担当)
 - スタディ・スキル習得を目的とする
 - リーディング・ライティング・プレゼン・ディスカッション・リサーチメソッド
 - 大学生活への適応
- 属人的な科目に陥る
 - 統一マニュアルの欠落(作成断念)
 - シラバスの有名無実化
 - 得意分野には効果あり⇒教育効果が担当者に依存
 - 学生による担当者間の比較(易き授業が良き授業へ)

⇒担当者それぞれにとっての「望ましい初年次教育」の実践へ

多人数科目におけるアクティブラーニング実践に関する課題

• 教員側

- 授業計画の中にどう組み込むべきか
 - 15回中何回をアクティブラーニングに充当するか
 - 頻度はどうするか(毎週?隔週?)
 - どう評価するのか
- 講義内容が薄まる可能性はないか
 - 講義の補完なのか、代替なのか
- 教員の負担が大きくなるか(予習・復習への対応、授業準備)
- ファシリテーター(TA等)を適切に確保・配置できるか
- 担当教員が上手にマネジメントできるか(得手不得手)
 - 事例から属人的要素を取り除けるのか
 - 「自分なりの」アクティブラーニングにならないか?

• 学生側

- 異なる目的、手法によるアクティブラーニングを同時に体験⇒モチベーションは維持できるか
- 同時期に複数科目のアクティブラーニングを実践⇒負担の期間集中、科目間での取組に差異が生じる
- 統一感のない予習・復習システム
- フリーライダーの発生
- 教員、ファシリテーターの比較が可能に
- 卒業単位要件に比して負担が大

⇒アクティブラーニングを実施しない科目への履修の偏り

アクティブラーニング実践の提案(1)

- アクティブラーニング特化科目の必要性
 - 複数の教員による担当(オムニバス)
 - 教員独自のスケジュール感による実践を回避
 - ファシリテーターの有効活用が可能に
 - 専門分野の統一性は必要⇒学生の関心に合わせる(⇒「関心を持たせる」タイプであれば統一性は不要)
 - 予習・復習システムは統一することが望ましい⇒仕組みを共有できる教員により担当することは必要
- アクティブラーニングに無関心な教員には無理に担当させない
- 強い理念と明確な方法論をもつ教員は独立して科目を担当してもらう
- 教員負担⇒コマ数増としてカウント
- 学生負担⇒負担量を自ら選択できる

アクティブラーニング実践の提案(2)

- 科目連携

- 同じ週に、講義とアクティブラーニングを並行実施できるというメリット
- 担当者が同じであれば、より効率的・効果的
- 講義の補完であれ代替であれ、時間的なロスが少ない(従来通りの講義内容を保証)
- 複数の講義科目との同時連携も可能

- 科目間の調整には時間がかかる
- 休講または欠席の影響が大きい

実践にあたってのポイント

- 問題意識の共有

- 「自分なりのアクティブラーニング」が並んでいるだけの状態を避けるため、組織ごとに問題意識(アクティブラーニングの目的)を共有することが重要
- 底上げか？エリート学生の養成か？
- 関心を持たせるための内容にするか、関心を深め、能力を高めていく内容にするか

- 技術的な問題

- 履修要件を設けるのか(連携する講義科目の履修を必須とするのか)
- 履修者制限をかけるのか(必修・必履修・選択)
- 適切な教室を確保できるのか

おわりに

- 新しい取り組みへの「期待と現実」
 - 「誰もがができる」実践マニュアルは存在しない
- 大学の違い、学部の違い、年度ごとの学生の質に依存
 - 基礎知識、モチベーション、目的の相違を直視する
- オムニバス方式の問題
 - 関心の強弱は不可避
- 成績評価の問題